日本現代文學全集・講談社版 102

井上靖 田宮虎彦 集

日本現代文學全集
102
井上靖・田宮虎彦集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和36年11月10日 印刷
昭和36年11月20日 第2刷

定價 450圓

© KŌDANSHA 1961

著者 井上靖（いのうえ やすし）
田宮虎彦（たみや とらひこ）

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷 株式會社 興陽社
製本 和田製本工業株式會社
製函 株式會社 岡山紙器所
株式會社 第一紙藝社
背革 厚川株式會社
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
口繪用紙 日本加工製紙株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

井上靖集目次

筆蹟

獵銃……五
ある僞作家の生涯……三一
山の少女……五二
大洗の月……六一
グウドル氏の手套……六九
花粉……七六
姨捨……八五
湖の中の川……九五
夏の雲……一〇〇
孤猿……一一三
滿月……一一八
樓蘭……一二六
敦煌……一四九
私の自己形成史……二四四

詩集 北國抄

作品解說……龜井勝一郎 四五四
井上靖入門……篠田一士 四六〇
年譜……四六七
參考文獻……四七七

田宮虎彦集　目次

筆蹟

無花果……二六九
風のひびき……二八一
眞　晝……二九三
異母兄弟……三〇四
土佐日記……三一九
足摺岬……三四五
繪　本……三五九
ぎんの一生……三七二
異端の子……三八六
銀心中……三九四
父という觀念……四〇七
童　話……四一四
比叡おろし……四二〇
母の死……四三九
失われた青春……四五〇
作品解說……龜井勝一郎　四五七
田宮虎彦入門……篠田一士　四六三
年　譜……四七二
參考文獻……四七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖集

薄暮とか黄昏とかいう言葉はあまり好きでない。夕方とか夕刻とかいう言葉が好きだ。

井上靖

獵　銃

私は日本獵人倶樂部の機關誌である「獵友」と言う薄つぺらな雜誌の最近號に「獵銃」と題する一篇の詩を掲載した。

斯う言うと、私は狩獵に多少なりとも關心を持つている人間のように聞えるかも知れないが、もともと殺生を極度に嫌う母親の手に育てられて、未だ曾て空氣銃一挺手にした經驗はないのである。たまたま「獵友」と言う雜誌の編輯に當つているのが、私の高等學校時代の級友で、いい年をして未だに詩の同人雜誌から足を洗えないで、自己流の詩を作つている私に、怖らくは、彼のほんのその場の氣まぐれからと、それに久濶を敍すると言つた程度の、儀禮的な意味をこめて、一篇の詩を依頼して來たまでの事である。何分雜誌が自分などには緣のない特殊な雜誌であるし、先方の注文も、何か狩獵に關係のあることに取材してとあつたので、平生の私なら、一も二もなく執筆をことわる筈であつたが、丁度その頃、ふとした事から獵銃と言うものと、人間の孤獨と言うものの關係に、詩的感興をそそられて、いつかこのモティフを作品にしてみよう、と考えていた矢先だつたので、これは至極恰好な發表場所だと思つて、十一月も末の、漸く夜寒がきつく感ぜられ出したある夜、十二時過ぎまで机に向つて、私流儀の一篇の散文詩をものして、翌日さつそく「獵友」編輯部へ送つたのであつた。

さてその散文詩「獵銃」なるものであるが、これから書こうとするこの手記に多少の繫がりを持つているので、一應、次に書き寫してみることにする。

その人は大きなマドロスパイプを銜え、セッターを先に立て、長靴で霜柱を踏みしだき乍ら、初冬の天城の間道の叢をゆつくり分け登つて行つた。二十五發の銃彈の腰帶、黑褐色の革の上衣、その上に置かれたチャアチル二連銃、生きものの命斷つ白く光れる鋼鐵の器具で、かくも冷たく武裝しなければならぬものは何であろうか。行きずりのその長身の獵人の背後姿に、私はなぜか強く心惹かれた。

その後、都會の驛や盛り場の夜更けなどで、私はふと、ああ、あの獵人のように歩きたいと思うことがある。ゆつくりと、靜かに、冷たく——。そんな時きまつて私の瞼の中で、獵人の背景をなすものは、初冬の天城の冷たい背景ではなく、どこか落莫とした白い河床であつた。そして一個の磨き光れる獵銃は、中年の孤獨なる精神と肉體の双方に、同時にしみ入るような重量感を捺印しながら、生きものに照準された時は決して見せない、ふしぎな血ぬられた美しさを放射しているのであつた。

この時の掲載誌が友から送り屆けられ、その頁をばらばらとめくつた時、迂濶な私は、その時初めて、自分の作品が「獵銃」と言うもつともらしい題は附けられてはいるものの、凡そこの雜誌には不似合のもので、各處に散見する獵道だとか、スポーツマン・シップだとか、あるいは健康な趣味とか言つた種類の言葉と、餘りにも判然りと反撥し合つていて、私の詩の組み込まれている頁だけが、まるで一つの居留地のように、孤立した全く別個の特殊地帶を作り上げている事に氣附いたのである。言うまでもなく、私がこの作品に盛つたものは、私が私の詩的直觀によつて把握した獵銃と言うものの持つ本質的な性格であつて、それが言い過ぎなら、少くともそ

れを意圖したものであつて、その點からは私は自負をこそ持て、些かも卑下するには當らないものであつた。若しこれが他の雜誌に載つたのなら、勿論そこに何の問題もないわけであるが、それが狩獵を最も健康濶達な趣味として宣傳する事を使命としている、日本獵人倶樂部の機關誌であるだけに、その中にあつては、私の獵銃觀は、大なり小なり、異端視され、敬遠さるべき性質のものであつた。斯うしたことに氣附くと、今更に最初私の詩稿を手にした際の友の當惑も察しられ、しかも怖らくは少からぬ躊躇を持つたであろうが、敢てこれを掲載した、如何にもその友らしい私に對する細い神經の配り方も想像されて、私はその當初その事で心痛んだものであつた。そして若しかしたら獵人倶樂部の誰からか抗議の一つぐらいは貰うかも知れぬと思つたのであつたが、それも私の杞憂にすぎなく、何時まで經つてもそれらしい一枚の葉書も舞い込んでは來なかつた。幸か不幸か、完全に私の作品は、全國の獵人たちから黙殺の待遇を受けたのであつた。あるいはもつと適當に言うならば、全然讀まれなかつたかも知れないのである。そしてこの事が私の念頭から全く忘れ去られて終つた二箇月程經つたある日、三杉穰介と言う全くの未知の人物から一通の封書が送られて來たのであつた。

泰山の古碑の一つに刻まれてある文字について、後代の史家が、野分の去つた後の、あの白い陽の輝きに似ている、と評しているのを讀んだ事があるが、私が手にした白い和紙の大型封筒の上に見出した三杉穰介の文字は、少し誇張して言えば、まさにそのような文字であつた。今は既に湮滅して、その古碑の一枚の拓本すら殘存していない今日、その筆蹟がいかなる風韻格調を持つものであるかは、もとより想像すべくもないが、三杉穰介の封筒からはみ出しそうに書かれた大きな草書體の文字が、一見豪宕な感じのする派手な達筆でありながら、そのくせ暫く眺めていると、一字一字の字面から、一種の空虛感のようなものの吹上げて來るのが感じられ、私はふと、泰山石刻の書に對する前記の史家の評言を思い浮かべたものであつた。墨をたつぷりと筆に含ませ、封筒を左手に持つて、一氣呵成に筆をすべらせたと思われるのだが、その筆勢には、所謂枯れたとは違つた、妙に冷たい無表情と無關心が覗いていて、いい換えれば、その自在な筆勢にのつけからいい氣持になつていない、いかにも近代人らしい自我も感じられ、世の達筆なるものの持つ俗臭や嫌味はなかつた。

それは兎も角、私の家の粗末な木製の郵便受の中に發見するには、その手紙の堂々たる風格は、少々場違いの感のある派手なものであつた。封を切つてみると、間餘の畫仙紙に一行五六字の大ぶりの文字を同じ自在な筆で走らせてある。——自分は些か狩獵に趣味を持つものであるが、先頃偶然に「獵友」誌上に御高作「獵銃」を拜讀する機會を得た。自分は生來の無法者で、もともと詩の風雅には無緣の徒であり、有體に申上げると、詩と言うものを讀んだのは後にも先にも今回が最初であつて、失禮ではあるが、御尊名にも初めて接したような次第であるが「獵銃」を拜讀して近頃にない感動を覺えた。——大體斯う言つた書き出しで、私はこれに最初目を走らせた時、忘れかけていた散文詩「獵銃」の事が思い出され、いよいよ狩獵家からの、それも相當の相手から抗議文が舞い込んで來たと思つて、一瞬心に緊張を感ぜざるを得なかつたのであるが、讀み進むにつれ、手紙の内容はかかる自分の豫想とは全く異つたものである事が解つて來た。其處には全く私の豫期せぬ事が綴られてあつたのである。三杉穰介は終始禮讓を失わぬ鄭重な言葉遣いで、併し他面その筆蹟の如く一種の自恃と冷靜さを忘れない頗る整つた文章で、「獵銃」の中に書かれてある人物は、怖らく斯く言う自分であろうと想像するがいかがであろうか、十一月初め天城の獵場に出掛けた折、山麓の村の何處かで、はしなくも私のつぼな背後姿がお目にとまつた事であると思う。雉專門に調教してある黑と白の斑らのセッター、倫敦にある時恩師より拜領したチャアチル、それに愛用のパイプまでお目にとまり、恐縮至極に存じている。なおその上、私

の悟りに遠いお恥づかしい心境まで御詩境に適い、光榮に存ずるし、面映ゆくも感じ、詩人と言う特殊な方の非凡な燗眼に今更ながら感服した次第である。――此處まで讀んで、私は改めて、彼の言う如く、伊豆の天城山麓の小さい溫泉部落で、五ヵ月程前のある朝、散歩に出た杉林の中の細い道で、ふと行き會つた一人の獵人の姿を新しく思い描いてみようとしたが、その時私の眼を惹いたその獵人の妙に孤獨な背後姿の漠然とした印象以外、何一つはつきりとは思い出す事はできなかつた。背の高い中年の紳士と言う以外、その人物の容貌は勿論のこと、その年恰好もはつきりした映像をもつては浮かび上つて來なかつたのである。

もともと私とて何も特別の注意をもつて、その人物を觀察したわけではなかつた。獵銃を肩にして向うからやつて來る一人の紳士の、パイプを銜えている姿が、普通の狩獵家とは違つて、何か思索的な雰圍氣をその周圍に持つて居り、初冬の朝の冷たい空氣の中で、それがいやに清潔に眼にしみて浮かび上つて見えたので、その時私は思わずすれ違つた後でその人物を振返つて見たまでの事である。するとその人物は歩いて來た小道から外れて、雜木の生い繁つている山へと道をとつて、長靴のすべるのを氣にしている風にゆつくりと、かなりひどい急斜面の道を、一歩一歩踏みしめながら登つて行くところで、それを暫く見送つている私の眼には、その背後姿が作品「獵銃」に書いたように、何故かひどく孤獨なものとして映つたのであつた。その時、その獵人の連れている獵犬が見事なセッター種である事ぐらいの知識は私も持合せていたが、その人が肩にしている獵銃が何であるかの鑑識眼は、狩獵に緣の遠い私が持つていよう筈はなかつた。獵銃の最高級品がリチャアドかチャアチルであると言う事を知つたのは、全く後日散文詩「獵銃」をものする際の一夜づけの知識であつて、私は全く自分の一存から、作品の中で勝手に紳士の肩に英國製高級銃を置かしめたのであつたが、それがたまたま實際の人物三杉穣介の持物と偶然に一致したわけであつた。そんなわけで、いま散文詩「獵銃」の主人公が自分だと當の本人から名乘り出られても、ああそうかと思うだけで、私の觀念の實體たる三杉穣介は依然として私には未知の人であつた。

その三杉穣介の手紙は更に續いていた。――突然變な事を申上げて御不審に思うかも知れないが、私は今ここに私宛の三通の手紙を持つている。私はこれを燒き棄てるつもりであつたが、御高作を拜見して貴方と言う人物を知り、ふとこの手紙を貴方にお見せしてみたい氣持が起つた。御靜境を煩わして甚だ相すまぬ次第だが、別便で三通の手紙をお送りする故お暇の折讀んで頂けないか、讀んで頂きたいと言う以外べつに些かの他意もない。私と言う人間が覗き見た貴方の所謂『白い河床』なるものが、如何なるものであるか知つて頂きたいと思うのである。人間と言うものは愚かなもので、自分と言うものを所詮は誰かに知つて貰いたいもののようである。私はそうした氣持をついぞ今まで持つた事はなかつたのだが、私と言う人間に特殊な關心を示して下さつた貴方と言う方のあるを知つて、ふと貴方に何もかも知つて頂きたい氣持になつたのである。お讀みになつた後は、手紙は三通とも私に代つて破棄して戴けたら結構である。なお伊豆で私の姿がお目にとまつたのは、私がこの三本の手紙を入手した直後のことかと思われる。併しながら、そもそも私が狩獵に興味を持つに至つたのは數年の昔に遡り、現在の天涯孤獨の身とは異り、公私兩生活において先ず先ず破綻なき時期、既に獵銃は私の肩にはなくてはならぬもののようであつた。このこと一筆申添えさせて戴く。――

私がこの手紙を讀んだ翌々日、前の手紙と同樣『伊豆旅館にて、三杉穣介』と言う差出人の名で、三通の手紙が送られて來た。それは三杉宛の三人の女性の手紙で、私はこれを讀んで、いやこの手紙を讀んだ後の私の感懷をここに記すことはやめよう。以下この三通の手紙を書き寫してみようと思うのだが、最後に一言、私には三杉なる人物が社會的に相當の地位を持つた人のように思われて、一

應、紳士錄、人名錄その他をくつてみたが、ついにその名を發見できなかつたこと、おそらくは、それが彼が私のために用いた假名であろうと言うことを附記しておく。なお手紙を寫すに當り、多くの墨で抹殺してある箇處のうちで、明らかに彼の本名が記されてあつたと思うところには三杉穰介の名を當て、文中に登場する他の人物は、すべて假名を用いた事をお斷りしておく。

薔子の手紙

おじさま、穰介おじさま。

母さんがお亡くなりになつてから、早いもので、もう三週間經ちました。昨日あたりからお悔み客もなくなり、おうちの中も急にひつそりして、母さんがもうこの世にいないのだ。と言う淋しさが、漸く實感となつて、心にしみ込んで來るようになりました。おじさまは隨分お疲れでございましたでしょう。お葬儀一切の事、親戚への御通知からお通夜のお夜食の御心配まで、何から何までなさつた上、母さんの死があんな特別なものでしたから、警察へも私に代つて何回もお運びになり、葛端御配慮戴きました事は、何ともお禮の申上げようもない次第でございます。あれから直ぐ、今度は會社のお仕事で東京へお出掛けになつたのですから、どうかお疲れが一度に出なければよいがと案じて居ります。

でもお立ちになる時の御豫定では、今日あたりは、既に、東京のお仕事もおすませになり、私も知つているあの、明るいが、どこか總體に冷たく沈んだ瀬戸物の繪のような、伊豆の美しい雜木林の風景に見入つていらつしやるのではないかと想像して居ります。伊豆御滯在中にこのお手紙を讀んで戴こうと思つて、薔子はペンをとりました。

おじさまがお讀みになつた後、パイプを銜えて風に吹かれていらつしやりたいような、そんな氣持になるお手紙をと、思うのですが、それがどうしても出來ないのです。さつきから、これから先が書けないで、何枚も何枚も便箋を無駄にして居ります。こんなつもりではなかつたのです。現在の薔子の考えを素直な心で申上げ、おじさまの御諒解を得ようと、何度も何度も、筋道を考え、このお手紙の豫習を終えてあるのですが、さて、ペンをとつてみると、急に申上げたいことが一度にどつと押し寄せて來て、いいえ、それも違つています。ほんとは、悲しい思いが、風のある日の蘆屋の海の白い波頭のように四方から押し寄せて來て、薔子の頭を混亂させてしまうのです。でもやはり、薔子は書いて參りましよう。

おじさま、申上げましようか、薔子は知つて居りますの、おじさまと母さんのことを。——何もかも、母さんがお亡くなりになる前日に知つたのです。薔子は母さんの日記を內緒で讀んで仕舞つたのです。

若しこの事を言葉に出して言わねばならないとしたら、それはどんなに辛い事でしよう。幾ら一生懸命になつても、結局は一言もまとまつた言葉として、薔子の口から出す事は難しかつた事と思います。お手紙だつたから書けたのです。恐ろしいのでも、怖いのでもありません。ただ悲しいのです。悲しみで、舌がしびれて仕舞うのです。おじさまが悲しいのでも、母さんが悲しいのでも、私自身が悲しいのでもありません。何もかもが、私を取卷いている青い空も、十月の陽の光りも、百日紅の木の肌も、風で動く竹の葉も、そして水も石も土も、目に見える自然のすべてが、口を開こうとする瞬間に、悲しい色に塗りかえられて仕舞うのです。私は母さんの日記を讀んだあの日から、私を取卷く自然と言うものが、一日二三回、多い時は五六回も、陽のかげるように、忽ち悲しい色に塗りかえられる事を知りました。おじさまと母さんの事をふと思い浮べただけで、忽ち私を取卷く世界は、全く變つたものになつて仕舞うのです。赤とか青とかの繪具箱の三十何色の色のほかに、悲しい色と言うものが、しかもはつきりと人間の目に見える、悲しい色と言う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものがある事を、おじさまは御存じでしようか。

私はおじさまと母さんの事で、誰にも祝福されない、祝福されてはならない愛情と言うもののある事を知りました。おじさまと母さんの愛情は、おじさまと母さんだけが知つていらつしゃる事で、他の誰も知らないのです。みどりおばさまも知らない、私も知らない、親戚の誰も知らない。お隣りの人も、お向いの人も、どんな親しいお友達も絶對に知らない、又知つてはならないものでした。お母さんが亡くなると、おじさまだけが知つていらつしゃる。そしてそのおじさまも亡くなつて仕舞うと、もうこの地球上では、そうした愛情と言うものが存在していた事さえ、想像する人は誰一人いないのです。私は今まで愛と言うものは、太陽のように明るく、輝かしく、神にも人にも、永遠に祝福されるべきものだと信じていたのです。清らかな小川のように陽の光りに美しく輝き、風に吹かれると無數の優しい小波を立て、岸の澤山の草や木や花にやさしく縁どられ、絶えず清らかな音樂を奏でながら、それ自身次第に大きく育つて行く、そうしたものをこそ、愛であると思い込んでいたのです。どうして陽の光りも射さず、何處から何處へ流れて行くかも知られない、地中深くひそかに横たわつている、一筋の暗渠のような愛と言うものを想像できたでしよう。

母さんは私を十三年間おだましになつていたのです。そして到頭お騙しになつたまま亡くなられたのです。私は如何なる場合でも、母さんと私との間に祕密があろうなどとは、夢にも考えられない事でした。母さんは何事につけても、よく親一人娘一人だもの、と御自身の口から仰言いました。唯お父さんとどうしてお別れにならなければならなかつたか、と言う事に關してだけは、貴方がお嫁に行く頃にならないと解らないからと仰言つて、お話になりませんでした。私は早くお嫁に行ける年頃になりたいと思いました。それは母さんとお父さんの事を知りたい爲ではありませんでした。母さんがそれを自分お一人の胸にしまつて置く事が、どんなにお辛いかと思つたからです。實際母さんはその事がひどくお辛そうでした。その母さんが、その他の事で私に秘密を持つていらつしゃうとは！

私がまだ小さかつた頃、母さんはよく、惡魔に魅入られて一匹の小兎を騙した狼の話をなさいました。その狼は兎を騙した罪によつて石になつて仕舞つたのでした。母さんは私を騙し、みどりおばさまを騙し、世の中全部の人を騙し、ああ、何と言う事でしよう。どんな怖ろしい惡魔に魅入られた事でありましよう。そうでした。母さんは御自分で日記に「惡人」と言う言葉をお使いになつていらしつたのです。私も三杉も惡人になるんだと。どうせ惡人になるんなら大惡人になりましようと。惡魔に魅入られたと何故お書きにならなかつたでしよう。小兎を騙した狼よりも、もつともつと不幸な母さん！　それにしてもあの優しい母さんと、私の大好きな穣介おじさまが、惡人、しかも大惡人の決心をなさろうとは！　大惡人になり切らなければ守れない愛情とは、それは、何と悲しいものでしよう。小さい時、西宮の聖天さんの縁日で、硝子の玉の中に嵌め込まれた赤い造花の花ビラの卦算を、誰かに買つて貰つた事がありました。私はそれを手に把つて歩き出しましたが、到頭泣き出して仕舞いました。何故、急に泣き出したか、誰にもその時の私の氣持は解らなかつたでしよう。身動きも出來ないで、冷たい硝子の中に凍りついている花ビラ、春が來ても、秋が來てもじつとしている花ビラ、礫になつている花ビラ、その花ビラの氣持を思つたら、急に悲しさがこみ上げて來たのです。それと同じ悲しみが、再び今私の心に蘇つて居ります。ああ、あの悲しい花ビラのようなおじさまと母さんの愛情！

おじさま、穣介おじさま。

薔子が母さんの日記を偷み讀んだ事について、おじさまはさぞお怒りの事と思います。併し私は虫の報せとでも言うのでしようか、母さんの亡くなる前日、母さんはこのまま助からないのではない

か、ふとそんな氣がしたのです。死期が近づいている。そんな不吉な豫感が、母さんのどこからか感じられたのです。母さんはおじさまも御存じのように、この半年、微熱がとれない以外、別段食慾も衰えたと言うのでもなく、頰などは却つて艶々として、前よりお肥りになつて來ているのでした。併し私にはこの頃の母さんの背後姿が、殊に肩から左右の腕へかけての線が、何故か、いやあな氣がする程、淋しく感じられてなりませんでした。お亡くなりになる前日、みどりおばさまがお見舞にいらしつたので、それをお報せに母さんのお部屋へ伺つたのですが、何氣なく唐紙を開けて、私ははつと致しました。前からもう派手になつたから私に上げようと仰言つて、疊紙に包んで簞笥におしまいになつたまま何年も減多にお出しにならなかつた、薊をぱつと大きく織出した納戸の結城のお羽織を着て、母さんは床の上に向うむきに坐つていらつしゃるのでした。まあと思わず聲を出しますと、

「どうしたの。」

と私の愕いたのが不審そうに、母さんはこちらをお向きになりました。

「だつて。」

と言つたまま、私は咄嗟には次の言葉が出ず、そのうちに自分でも何で大袈裟に愕いたか解らず、可笑しさがこみ上げて參りました。着物道樂の母さんが、昔の派手な着物を出して着る事は何も珍らしい事でありませんでしたし、殊に御病氣になつてから憂さを晴らされるのか、派手なもの派手なものと、何年も手を通さない着物を簞笥からお出しになつて着る事は、母さんの日課の一つのようになつていたのです。併し後で考えてみると、やはりその時、私は結城のお羽織を召した母さんに驚いたのです。目の醒めるようにと言つても言いすぎではない程、母さんは美しく見えたのです。そして同時に、あんな淋しい母さんを見た事がないくらい、淋しく見えたのです。私のあとから續いていらしつたみどりおばさんも、お部屋にお這入りになると直ぐ、おきれいねと仰言つて、そのまま暫く見惚れたように口を噤んで坐つていらつしゃいました。

その母さんの結城のお羽織を召した背後姿の、美しいがひどく淋しい感じは、まるで心の中に沈められた一個の冷たい錘りのように、その日一日私の心から離れませんでした。

夕方になつて、その日一日吹いていた風が落ちましたので、私は定代ねえやと、お庭のあちこちに散らばつていた落葉を掃き集めて、それに火を點けました。そして序でに、先日莫迦らしい程の高いお金を出して買つた藁束を持つて來て、母さんのお火鉢に入れる藁灰を作ることにしました。するとお座敷に坐つて、硝子戸越しにそれを見ていらしつた母さんが、綺麗なハトロン紙にきちんとお包みになつたものを持つてお縁側に出て來られて、

「これを一緒に燒いて頂戴！」

と仰言いました。これなんなの、と私がお訊きすると、なんでもいいから、と何時になくきつく仰言いましたが、その後から思い直されたのか、

「日記よ、母さんの。」

と靜かに仰言つて、

「そのまま燃して頂戴よ。」

と念を押されて、それからくるりと背をお向けになると、まるで風にでも運ばれて行くように、妙に危つかしい足取りで廊下を向うにお歩るきになつて行かれました。

藁灰作りは半時間程かかりました。最後の一本の藁屑がめらめらと燃え上つて、紫の煙りに化して仕舞つた時、私の心は決まつたのです。母さんの日記を持つてそつとお二階の自分の部屋に上ると、それを棚の奥の方へかくしました。夜になるとまた風が出て來ました。凄さまじい程白い月の光りに照らし出されたお庭は、二階の窓から見ると、何處か北の果の、荒磯のような荒涼とした感じで、風の渡る音が打寄せる波濤のように聞えました。母さんも定代ねえや

もとうに寢につき、起きているのは私一人でした。お部屋が直ぐには開かぬように、ドアの所に重い百科全書を五六册積み重ね、窓のカアテンも完全に降ろして仕舞うと（部屋に流れ込む月の光りさえも私は怖かつたのです）スタンドのシェードを加減して其處へ大學ノート一册を置きました。それがハトロン紙の包み紙の中から出て來た母さんの日記だつたのです。

おじさま、穣介おじさま。

私はこの機會を外したら、お父さんと母さんの事を永久に知る事は出來ないと思つたのです。私はそれまで素直にお嫁に行く時母さんが話して下さるまで、お父さんの事は知りたいとは思つていませんでした。門田禮一郎と言うお名前だけを大切に胸の奥にしまつておいたのです。併し書間母さんの結城のお羽織を着た背後姿を見た時から、私の考えは變つていたのです。何故か母さんの御病氣がもう癒らないだろうと言う事が、私の心の中で一つの悲しい確信になつていましたから。

母さんが何故お父さんと別れねばならなかつたかと言う事は、明石の祖母や親戚の人たちの口から、何時とはなく私の耳にも這入つていました。お父さんが學位をとる爲に、京都の大學の小兒科で研究していらつしやる頃、當時五歳の私は、母さんと祖父母と女中たちと明石の家に住んでいたのですが、四月の風の強いある日、生れた許りの赤ちやんを抱いた、若い女の人が母さんを訪ねて來ました。その人はお座敷にあがると、床の間に赤ちやんを置いて、それから帶を解くと、持つて來た小さいバスケットから、長襦袢を取出して着換えを始め、お茶を運んで來た母さんをびつくりさせました。その人は狂つていたのです。床の間の赤い南天の實の下で眠つている肥立ちの惡い赤ちやんは、お父さんとその女の人との間に出來た子供だと言う事が後で解りました。

その赤ちやんは間もなく亡くなり、その女の人は幸いにその精神異常が發作的なものだつたので、その後間もなく常態にかえり、現在では岡山の商家に嫁いで、倖せになつていると聞いています。母さんが私を連れて、明石の家を飛び出したのは、その事件があつてから間もなくで、お聟さんだつたお父さんは、結局明石の家を去る事になつたのでした。私が女學校へ入つた時、明石の祖母は、

「彩子もいつこくもんで、出來た事は仕方がなかつたのに」

と仰言つた事がありました。母さんの潔癖がお父さんの過失を許せなかつたのでしようか。私がお父さんとお母さんの事について聞き知つているのは、これだけなのです。七、八歳頃まで、私はお父さんは亡くなつたものとばかり思つていました。そう思い込まされて育つたのです。そうです、現在でも私の心の中では、お父さんは亡くなつているのです。此處から一時間とはかからぬ兵庫で、現在大きい病院を經營していらつしやると言うお父さん、今でもおひとりでいらつしやると言うお父さん、そんな現實のお父さんを、私はどうしても想像する事は出來ないのです。現實にお父さんは生きて居られても、私の、薔子のお父さんはとうに亡くなつているのです。

私は母さんの日記の第一頁を開きました。そして喰いつくような私の眼が、そこに最初發見した文字は、意外にも罪、そうです、罪と言う文字だつたのです。罪、罪、罪と數個の罪と言う文字が、母さんの筆蹟とは思われぬ程、荒々しく書き記されてあつたのです。そしてその積み重ねられた幾つかの罪と言う文字の下に、いかにもその罪と言う文字の重さに苦しんでもいるように、「神さまお許し下さい。みどりさん許して下さい」と、ただそれだけ亂暴に認められてありました。その周圍の他の文字は全部消え、その一行の文字だけが惡魔のように息づいて、今にも跳びかからんばかりに、こちらを怖ろしい顔をして窺つているのでした。

私は咄嗟にばたんと日記を閉じました。何と言う怖ろしい瞬間だつたでしよう。しいんと四邊は靜まつて、薔子の心臟の鼓動だけが

大きく聞えているのです。私は椅子から立上つて、もう一度扉や窓を開かないように注意し、それから再び机に戻ると、思い切つてもう一度日記を開きました。そして私は自分こそ悪魔になつたような氣持で、母さんの日記の全部を、隅から隅まで一字殘らず讀んで仕舞つたのです。私があれ程知りたかつたお父さんの事はただの一行も書かれてなく、其處には夢にも信じられぬおじさまと母さんの事ばかりが、薔子が想像した事もない亂暴な母さんの言葉で書かれてあつたのです。母さんはある時は苦しみ、ある時は喜び、祈つたり、絶望したり、時には死を決し――そうです、母さんは何回も何回も自殺をさえ決心していらつしやるのでした。萬一みどりおばさまにおじさまとの事が判つた時は、その時は母さんは死ぬつもりでいらつしやるのでした、いつもあんなに樂しげに、あんなに明るく、みどりおばさまと話していらつしやる母さんが、こんなにも、みどりおばさまを怖がつていらつしやろうとは！

その日記では、母さんは十三年間、常に死を背負つて生きて居られました。ある時は四日も五日も續け、ある時は二箇月も三箇月も何も認めてないこの日記は、併し、どの頁にも何時も自分の死と顔をつき合せていらつしやる母さんが居るのでした。死ねばいいじやあないの、死ねば總てが解決するじやあないの、ああ、こんな捨鉢な蓮葉な言葉を、一體何ものが母さんに書かせたのでしよう。死ぬと決心していれば何を怖がる必要があろう。もつと圖太くなること、彩子！　こんな不逞な言葉を、一體何ものが、あの優しい母さんに叫ばしたのでしよう。それは愛情だつたのでしようか。愛情と呼ぶ、あの美しい輝かしいものだつたのでしようか。ふさふさした丈長い髮束をゆたかに廻し、兩の手で蕾のように上向いた乳房を押え、美しい泉のほとりにすつくりと立つた、あの誇り高い裸女を、これが愛だと教えてある書物を、いつか、おじさまは私の誕生日の贈り物に下さいましたが、ああ、おじさまと母さんの愛情は、それとはなんと違つたものでしたでしよう。

母さんの日記を讀んだ瞬間から、みどりおばさまは、薔子にとつても世の中で一番怖ろしい方になりました。母さんの祕密の苦しさは、そのまま薔子のものになりました。ああ、あのいつか口をきゆつとつぼめ、薔子の頰に口づけなさつたみどりおばさま！　母さんとどちらか解らぬほど薔子の大好きなみどりおばさま！　私が蘆屋の小學校の一年にあがつた時、大きい薔薇の花の模樣のついたランドセルをお祝いに下さつたのも確かみどりおばさま。それから丹後の由良の臨海學校に出掛ける時、鷗の大きい浮き袋を下さつたのもみどりおばさま。二年生の學藝會の時、私はグリムの「おや指坊や」のお話をして大喝采を博しましたが、毎晩のように、御褒美を出してはそれを練習させて下さつたのもみどりおばさま、それから、それから、小さい時の事は何を考えても、そこにはみんなみどりおばさまがいらつしやいます。母さんと從妹で、母さんと一番仲よしだつたみどりおばさま。今はダンスだけですが、麻雀もゴルフも水泳もスキーもお上手だつたみどりおばさま。薔子の顔より大きいパイを燒きなさるみどりおばさま。寶塚少女（スカガール）をいつぱい連れていらしつて、母さんと薔子をびつくりさせたみどりおばさま。ああ、何故いつのみどりおばさまも、こんなに明るく、まるで薔薇の花のように樂しげに、母さんと薔子の生活の中に這入つていらつしやるのでしよう。

おじさまと母さんの事で、若し豫感と言うものがあるとしたら、薔子にも一度だけ、そうした事がありました。それは一年程前の事です。お友達と一緒（ダ）に學校へ行く途中、阪急電車の夙川まで來て、私は課外の英語讀本を家に忘れて來た事を思い出したのです。そしてお友達に驛で待つていて戴いて、自分一人家に取りに歸つたのですが、家の御門の前まで來て、私は何故か門の中へ這入る事が出來なかつたのです。その日朝からねえやはお使いに出て居り、家の中には母さんお一人だけいらつしやる筈でした。併し、母さんがお一

人でいらつしやると言う事が、私は何故か不安だつたのです。怖かつたのです。私は御門の前に立つて、躊躇の植込みを見詰めたまま、這入ろうか、這入るまいか、暫く考え込んでいました。結局英語讀本を持つて來る事はあきらめて、又お友達の待つている夙川の驛へ引返したのです。それは何故だか自分でも解らない不思議な氣持でした。先刻私が學校へ行くため御門を出た瞬間から、家の中では、母さんお一人の時間が流れ始めた、そんな氣持でした。若し私が這入つて行つたら、母さんはお困りになるのだ、母さんは悲しそうな顏をなさるのだ、そんな氣持でした。そして私は言いようのない孤獨な氣持で、蘆屋川に沿つた道を石を蹴り蹴り歩いて、驛へつくと、お友達の話しかけるのも上の空で聞きながら、待合室の木のベンチに身を持たせかけていたのです。

こんな事は後にも先にもただの一度です。併し、私は今この豫感というものを無性に怖ろしく思います。ああ、人間はなんて嫌なものを持つている事でしょう。私が持つたこの何の根據もない豫感を、何時如何なる時に、みどりおばさまがお持ちにならなかつたと斷言できるでしようか。トランプの時、相手の心をポインターよりも敏捷に嗅ぎ出す事が、何よりも御自慢のみどりおばさまが。ああ、思つただけでも怖ろしい事です。でもこれは薔子の滑稽な杞憂にすぎないでしよう。總ては既に終つて仕舞つたのです。祕密は保たれたのです。いいえ、祕密を保つために、母さんは亡くなられたのです。斯う薔子は信じます。

あの忌わしい日、母さんの短いが併し見ていられないような、あの烈しい苦悶が始まる直前、母さんは薔子をお呼びになつて、文樂のお人形のような妙にすべすべしたお顏をなさつて仰言つたのでした。

「母さんはいま毒を飲みました。疲れたの、もう生きて行くのに、疲れたの。」

と。それは薔子に仰言ると言うよりも、薔子を通して神さまにでも仰言るような、不思議に澄んだ、天上の音樂のようなお聲でした。前夜母さんの日記で讀んだばかりの、あの、罪、罪、罪とエッフェル塔のように高く積上げられた罪の文字が、轟然と母さんの周圍に崩れて行く音を私ははつきりと聞きました。十三年間支えて來た何層かの罪の建物の重さは、今疲れきつた母さんを、押し潰し、押し流そうとしているのでした。その時、放心したように母さんの前にぺたんと坐つて、母さんの遠いあらぬ方を見遣つている視線を追うていた私を、突如、谷から吹上げて來る野分のように、襲つて來たものは怒りでした。怒りに似た感情でした。何ものかに對する言い知れぬ忿懣の、煮え沸つたような熱い感情でした。私は母さんの悲しいお顏を見詰めた儘、

「そう。」

唯それだけ短く他人事のようにお返事しました。お返事すると、心はさあつと、水をかけたように冷たく冴えかえつて來ました。そして自分でも愕く程冷靜な氣持で立上ると、お座敷を横切らず、水の上でも歩くような氣持で長い鍵の手のお廊下を渡つて行き（この時でした。死の濁流に呑まれる母さんの短い悲鳴が聞えて來たのは）、そして突當りの電話室に這入り、おじさまにお電話したのです。併し、五分後にけたたましくお玄關から轉げ込んでいらつしつたのは、おじさまではなく、みどりおばさまでした。母さんは誰よりも親しい、そして誰よりも怖れた、みどりおばさまに手を握られたまま、息を引取り、そしてみどりおばさまの手で白い布片を、もう辛い事も悲しい事もお感じにならなくなつたお顏の上にお載せになつたのです。

おじさま、穰介おじさま。

あの最初のお通夜の晩は、この世で考え得られぬ程、靜かな靜かな晩でした。警察の人だとかお醫者さまだとか近所の人だとかの、あの晝の夥しい人の出入りがぴたりと止まつて、夜になるとお棺の

前には、おじさまとみどりおばさまと私だけが坐つて、誰も話をなさらず、みんなひたひたと寄せる微かな水の音でも聞いているような具合でした。お線香がなくなる度に交代で一人が立つて行つては、お線香を立てたり、お寫眞を拜んだり、そつと窓を開けてお部屋の空氣を換えたり致しました。おじさまが一番お悲しそうでした、お線香を立てに立つていらつしやる時、おじさまはそれはそれは靜かな視線で、じいつと母さんのお寫眞をお見詰めになり、そして悲しそうなお顏に、誰にも解らぬような微かな笑いをお作りになるのでした。母さんはたとえどんなにお辛い一生だつたとしても、やはりお倖せだつたかも知れないと薔子はあの晩何回思つた事でしよう。

九時頃、窓の所へ立つて行つた私が、突然聲を上げて泣き出した事がありました。おじさまはその時立上つていらしつて、靜かに薔子の肩に手をお置きになり、暫くそうしていらしつて、何とも仰言らず又默つて座にお戻りになりましたが、あの時、薔子は母さんの死に對する悲しみがこみ上げて來て、泣いたのではありません。晝、母さんが最後のお言葉の中で、おじさまのおの字も仰言らなかつた事を思い出し、それから又、母さんの一大事をおじさまにお電話した時、みどりおばさまでなくて、何故おじさまが駈けつけていらつしやらなかつたのだろうか、そんな事を考えているうちに、急に何か切ない氣持がこみ上げて來たのです。亡くなる最後まで、お芝居をしていなければならぬおじさまと母さんの愛情と言うものが、硝子の中で礫になつている卦算の花ビラのように可哀そうに思われて來たのです。そして立上つて窓を開け、冷たい星空を見入つて、聲になりそうな悲しみを我慢していたのですが、ふと、あの星空の中を、今母さんの愛情が昇天しつつあると思つたら、誰にも知られず、こつそりと、星と星との間を走つているのだと思つたら、薔子はもう我慢できなくなつたのです。その昇天しつつある愛情の悲しみの深さに較べれば、母さんと言う一個の人間の死の悲しみなど、較べものにならないように思えました。

お夜食のおすしのお箸をとつた時、私はもう一度烈しく泣き出しました。みどりおばさまは、

「確りなさいね、あなたの氣持、私、どうして上げようもないのが辛いわ。」

と靜かなお聲で優しく仰言いました。私が涙を拭いて眼を上げると御自分も涙をいつぱい溜めて、みどりおばさまは私を見詰めていらつしやいました。私はおばさまの濡れた美しい眼を見ながら、默つて冠を左右に振りました。おばさまは、その時の、私の小さい仕種をお氣にとめなさらなかつたでしよう。薔子はあの時、實はみどりおばさまが、急に可哀そうになつて泣いたのです。みどりおばさまが、母さんにお供えするおすしをお皿にとり、それからおじさまの分、薔子の分、御自分の分と、四つのお皿におすしをお移しになつているのを見て居たら、急に何故か、ああ、みどりおばさまが一番お氣の毒な方なのだと、そんな氣持が嗚咽となつて突上げて來たのです。

薔子はあの晩、もう一回泣きました。それは、おじさまおばさまに、明日が大變だからとすすめられて、次の間のお床の中に這入つてからです。お床へ這入ると、一旦は晝の疲れで直ぐ眠りましたが、寢汗をびつしよりかいて眼を覺ましました。違い棚の時計を見ると、一時間程經つています。お隣りのお棺のあるお部屋は、先刻と同じようにしいんとして、時々、おじさまがライターをお使いになる音以外、何の物音も聞えないのです。半時間程經つた頃、

「暫く休んだら？　僕が起きている。」

「いいわ、あなたこそ。」

斯う言う、おじさまとおばさまの、短い會話が聞えましたが、それはそれだけで、又もとの靜けさに返り、何時まで經つてもその靜けさは破られませんでした。薔子はお蒲團の中で三度目に烈しく泣きじやくりました。今度の薔子の泣き聲は、おじさまにもみどりお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com